岡山県医師会女医部会報

第19号
2015.3.25

URL http://www.okayama.med.or.jp/ishi/bukai/bukai.html

目　次

山陽女子ロードレースでの活動 …… 1
「平成26年度日本医師会女性医師支援センター事業　中国四国ブロック会議」の報告 …… 2
2014年度　日本女医会子育て支援委員会「十代の性の健康」支援ネットワーク　ゆいネット岡山　第7回協議会の報告 …… 2
第11回岡山ビジョンナ会講演会　第16回　Doctor's Career Café in OKAYAMA …… 4
シリーズ女性医師支援　病院での取り組み「岡山赤十字病院」 …… 5

岡山県医師会

〒703-8522
岡山市中区古京町 1-1-10
TEL 086-272-3225
FAX 086-271-1572
E-mail：
oma@po.okayama.med.or.jp
URL：
okayama.med.or.jp/ishi/bukai/bukai.html

山陽女子ロードレースでの活動

岡山県医師会女医部会　部会長　**深田好美**

第33回山陽女子ロードレースへ、救護班とがん検診・風疹ワクチンの啓発活動のために女医部会として３回目の参加をしました。毎年12月の連休頃に開催されるのですが、今年は岡山駅前にイオンが開業するため交通渋滞を避けようと１ヶ月早くなり、11月16日（日）に行われました。行事が多い時期にもかかわらず５名の女医部会委員の方々に来ていただけました。

天気が良く、走る選手にとっては暑すぎるのではと思われるくらいでした。有森裕子杯ハーフ、人見絹枝杯10kmロードレースが行われ、スタジアムを回ったあと外に出て行きますが、トップは黒人の招待選手で、そのスピードと筋肉だけのような手足に今更ながら感心しました。昼過ぎには表彰式も終了し来年から「おかやまマラソン」が始まるそうで、今回フルマラソンの10分の１にあたる4.2195kmを走る「10分の１おかやまマラソン」がスタジアムとその周りで行われました。子供達や岡山のゆるキャラも参加して楽しそうに走っていました。

今年は、乳がん・子宮がんの他に、風疹予防のパンフレットとバンドエイドをセットして配りました。女性が主ですが、子供連れのお父さんやお母さん、お孫さんのいる年代の方にも渡しました。早期発見で治るがんを手遅れにしない。これから妊娠を考えている年代に是非、風疹ワクチンを考えてもらう。一人でも多くの方に声をかけていけたらと思います。

来年の課題ですが、救護物品の不足やスタジアム外での事故の対応に関して主催者側との打ち合わせをしっかりしたいと思いました。

カンコースタジアムの周りはちょうど木々の紅葉が美しく、日頃外に出る事の少ない私たちも元気のよい選手たちを見て、たまにはウォーキングでもしなくてはと思った一日でした。

「平成26年度日本医師会女性医師支援センター事業 中国四国ブロック会議」の報告

岡山県医師会女医部会　副部会長　坂口紀子

平成26年12月20日（土）午後３時より、岡山コンベンションセンター405会議室にて、上記の会議が開催されました。平成25年度に続く岡山での開催となりました。

当日、日本医師会からは女性医師支援センター副センター長の保坂シゲリ先生をはじめ、各ブロック女性医師バンクのコーディネーターの方々、そして担当常任理事の岡山県・笠井英夫先生が出席されました。

また、岡山県を除く中国四国各県からは27名の参加者を迎え、岡山県医師会からは石川紘会長、糸島達也副会長、神﨑寛子理事（日本医師会女性医師支援委員会委員）、女医部会メンバーなど11名が参加しました。

まず、保坂シゲリ先生から日本医師会女性医師バンクの運用状況が報告されました。平成19年以降の求職登録者数は累計718名、求人登録施設数の累計1910施設、就業実績は累計401件で、内容は充実してきており、この事業の発展の為には男性会員にもさらに周知が必要とのことでした。

次に、岡山県・神﨑理事より中国四国９県の産休・育休中の代替医師確保についてのアンケート結果が報告されました。多くの県で、医師派遣を依頼するのは大学医局であり、人員に余裕がなく派遣されない場合は、代替医師は確保できない現状で、医師不足がこの問題にも影を投げかけていました。

その後の会議の多くの時間を使って、各県の女性医師支援の取り組みが報告され、質問や意見交換がありました。復職支援、短時間勤務制度、保育支援など、環境や制度に関しては、徐々にですが確実に、状況は好転していると感じます。それと並行して、制度を利用する女性医師や職場、パートナーの男女共同参画に関する意識改革も必要ですが、こちらは効果の検証はなかなか難しく、種々の方策を地道に続けていかなければならないと思います。医学生の時期から、或いはもっと若い年齢から個人が社会に貢献することの意義や、互いを尊重し合う考え方が身に付くよう、多方面からの取り組みが行われています。医学生との懇談、キャリアデザインの支援などに関しては教育研修機関との連携が必須ですが、幸い岡山県は平素から岡山大学医療人キャリアセンター事業などを通じ、連携はよく取れていると思います。

会議の最後に平成27年度担当県について協議しましたが、他県の参加者から交通の利便性の理由で、引き続き岡山開催を望む声が多く、石川会長が快くこれを了承されたため、平成27年度の会議も岡山での開催が決まりました。このメンバーが一堂に会して話ができるのは、年１回の限られた時間ではありますが、日本医師会の関連会議や講演会などでお会いする機会も多く、ざっくばらんに各県の情報交換をする中で、アイデアを戴くことができる有意義な午後でした。

2014年度　日本女医会子育て支援委員会 「十代の性の健康」支援ネットワーク　ゆいネット岡山　第7回協議会の報告

岡山県医師会女医部会委員　日本女医会子育て支援委員会委員
岡山中央病院　産婦人科　金重　恵美子

第７回ゆいネット岡山協議会を、2015年１月26日（月）18：30～21：30　岡山中央病院セミナー室で開催した。ゆいネット岡山協議会は、日本女医会が2008年より取り組んでいる、十代の性の健康支援

ネットワーク事業（ゆいネット）であり、親や教師が対応に苦慮する思春期の若者の性の問題（妊娠、中絶、レイプ、デートDV、新生児遺棄、STD/AIDS、性犯罪等）について、地域で適切に速やかに連携し対応できる子育て支援ネットワークを構築し、問題解決とともに予防、啓発活動に取り組んでいる。岡山でも、ゆいネット岡山協議会として行政・警察・教育・医療を結ぶネットワークができ、年１回協議会を開催し今回が７回目になる。今回はゆいネットの活動に、県医師会の先生方のご協力を仰ぐことができないかと考え、石川　紘会長にご出席を依頼した。

■ 参加者

石川　　紘　岡山県医師会　会長
深田　好美　岡山県医師会女医部会会長
　　深田内科院長
片岡　仁美　岡山大学大学院
　　地域医療人材育成講座教授
中塚　幹也　岡山大学大学院保健学研究科教授
上村　茂仁　ウィメンズクリニック・かみむら院長
野々上　勝　岡山県教育庁保健体育課健康・
　　安全教育班　指導主事
岡　　浩美　岡山県警察本部生活安全部
　　少年サポートセンター
平松　敏夫　㈳被害者サポートセンターおかやま
　　（VSCO）理事長
寺田　和子　㈳被害者サポートセンターおかやま
　　（VSCO）業務執行理事
森　　陽子　㈳被害者サポートセンターおかやま
　　（VSCO）理事
真邊　和美　前「さんかく岡山」企画調整監
横田　悦子　岡山県議会議員
鬼木のぞみ　岡山市議会議員
岡崎　愉加　岡山県立大学保健福祉学部看護学科
　　准教授
富岡　美佳　山陽学園大学看護学部看護学科
　　准教授
別府　治恵　岡山大学大学院
　　地域医療人材育成講座
梁川　奈穂　ピアグループ（ELL）
徳川あゆこ　ピアグループ（ELL）
金重恵美子　岡山中央病院副院長　産婦人科
小林比佐子　岡山中央病院ウィミンズセンター　SV
佐々木与子　セントラル･クリニック伊島
　　健康増進予防センター　CL
山下　孝子　岡山中央病院　ウィミンズ秘書

以上22名の参加があり、医療だけでなく、教育、行政、警察、支援団体、議員、学生と様々な分野で思春期の性の健康に関する問題に関係されている方々に最近の活動・話題提供をしてもらい情報共有をした。

次いで、「思春期の行動変容を促進する性の健康教育～コミュニティの力の結集へ向けて～」と題してゆいネット岡山委員の富岡美佳先生が話題提供した。日本の性教育の研究動向を分析し、日本の「学校における性教育の考え方、進め方」をアメリカ、イギリスなど欧米の性教育の考え方と比べて解説。その後、行動変容を促す性の健康教育プログラムの開発と普及についての紹介と、主催しているライフスキル研究会の活動を披露された。

今回の協議会のメインテーマ、「体と心と性の健康教育の普及を目指して、私たちができること」については

・性の健康教育を行う側の立場から
　（ウイメンズクリニック・かみむら
　　上村茂仁院長）
・性の健康教育を行う環境の整備を行う立場から
　（岡山県教育庁保健体育課健康・安全教育班
　　野々上　勝　指導主事）
・性の健康を守る立場から
　（岡山大学大学院保健学研究科　中塚幹也教授）

の３名より講演があった。

これらをもとに、「十代の性の健康」のための支援活動についてと、性の健康指導者養成講座案および行政、教育、メディア、医師会との連携についての可能性と制約について議論した。最近の少子化の課題として、晩婚化、卵子の加齢と妊娠力低下問題、不妊などがあるが、思春期に健康な性の知識をもちライフスキルを磨くことが解決に役立つと考えられる。「岡山は性教育進んでるね。人材が豊富で羨ましい。」と他県ではいつも言われるが、上村先生、中塚先生はじめ頑張っている先生方をサポートできる人材育成を継続して、県下全ての子どもたちに良

質で効果的な性教育がなされるシステムができることを願っている。

■ まとめ

岡山県内の多くの思春期のセクシュアル・ヘルスに向けた取り組みを知ることができた。医療、行政、教育、相談窓口、ピアなどあらゆる立場からの意見を交換することによりさまざまな課題が明確になり、皆が「10代の性の健康」を支援するというひとつのベクトルに向けて歩みだす機会を得ることができた。

ゆいネット岡山協議会が十代の性の健康を支援する有意義なネットワークとして今後継続して活動するため、岡山県医師会の多くの先生方のご協力を宜しくお願い申し上げます。

第11回岡山ビジョンナ会講演会
第16回　Doctor's Career Café in OKAYAMA

岡山赤十字病院眼科　加藤睦子 先生

岡山の眼科女医の会である岡山ビジョンナ会が平成27年１月10日（土）の夕刻、ホテルグランヴィア岡山で、50名（女性40名、男性10名）の参加で開催されました。内容は以下の通りです。

■ 特別講演１
「感染症科専門医としてのキャリア形成と国際医学部構想」

矢野（五味）　晴美 先生

（筑波大学医学医療系　教授、筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター・水戸協同病院グローバルヘルスセンター感染症科）

岡山大学医学部出身、感染症が専門、岡山赤十字病院で研修、NHKの番組「総合診療医ドクターG」に出演、という、私が理解した安易な経歴を覆す、信念の最先端医師でした。

1993年卒後、沖縄米海軍病院でインターン、New Yorkで内科レジデント、Houstonで感染症科フェローという進路のきっかけは、小学生の頃感じた英語への憧れ。大学入学まで毎日ラジオ基礎英語を聞いた事、医学部２年、３年で英語夏期コースを受講した事で、医局に属する普通の道を飛び出されました。岡大衛生学で博士課程を卒業し、LondonやJohns Hopkins大学、オランダMaastricht大学で数々の学位を取得。現在もMaastricht大学の大学院で遠隔教育を受ける傍ら、全身全霊で「日本の感染症科をつくる」という仕事に取り組んでおられます。

そのグローバルな姿勢は、日本の医学部教育改革にまで進み、「国際医学部構想・医学開国のすすめ」を提唱。医学部教育は、１）日本語と英語のバイリンガル教育、２）ディスカッションと実践教育でなければならないとの持論を、政治的な所まで進行させておられます。

もう一つの感動は、出会った「上下左右の人間関係」を大切に継続させておられる事です。本当にパワーのある人というのは、意志を持って進める人。自分のキャリアを未来に還元することが出来る人。忙しくても人とのコミュニケーションが円滑に築ける人。だと感銘を受けました。

■ 特別講演２
「明治の女性医師たちの夢と現代」

若倉　雅登 先生

（済安堂井上眼科病院名誉院長）

先生は北里大学でご活躍後、井上眼科病院での神経眼科、心療眼科で有名ですが、今回特別講演を依頼したのは、作家としての一面がきっかけでした。同院で育った日本初の眼科女医・右田アサさんを題材にした小説「高津

川」は東京新聞で「第１回医学文学賞に値する」と評されました。

名も知られていない女性医師の一人一人に物語があり、それを紐解く高名な男性医師が、楽しそうに話されているのも印象的でした。井上眼科病院は、眼科医20～25名、患者数１日1000～1500人、年間患者数45万人という大病院です。そこで神経眼科・心療眼科を担当される若倉先生は、患者様の訴えを完全予約制でゆっくりと聞いておられますが、そのストレス発散が執筆活動だとのこと。若々しいお声でのご講演は奥深いものでした。

病院は身体の異常だけみればよいのでなく、ロービジョン者の社会、心理的支援もするべきとの信念で、同院に「目の相談室」を立ち上げられたそうです。

眼科医としての姿勢を正して頂きました。

■ 懇親会

Jazzを楽しみながら、会員間の親睦を深めました。会員近況報告では会員８名の趣味や近況をスライドショーで紹介。仕事以外に生活を楽しむ姿に、元気を頂きました。今年で第11回を数える本会は、他県の女医部会との交流もあり、知識だけでなく女医として働く意欲を刺激してくれる素晴らしい会です。皆様のご参加をお待ちしています。

シリーズ
女性医師支援
病院での
取り組み

第13回
「女性医師支援に対する岡山赤十字病院の現状と課題」

岡山赤十字病院
院長　忠田　正樹 先生

病院という所は元来女性の多い職場です。当院では全職員の約８割が女性です。また現在、当院医師のおよそ２割が女性医師で、以前より徐々に多くなってきています。そのことで昨今問題になっているのは、女性医師に問題があるのではなく、働く職場すなわち病院における医師の人事管理です。

女性といえども医師であるならば、医療現場では男女の区別なく仕事をこなさなければなりません。しかし当然ながら男性と女性とでは、ライフイベントが異なっています。女性は医師といえども、妊娠・出産・育児で一時的にでも職場を離れざるを得ない場合があるでしょう。その時に職場としてどう取り組むかが問題です。

例えば、妊娠中や子育て中の女性医師に対する勤務の緩和は、同じ職場のそれ以外の医師にとっては負担の増加になり、不公平感が生まれることも考えなければなりません。

その点などを踏まえながら、当院の現状と対応について述べてみます。

①当院の現状と女性医師

平成27年１月現在、当院の全職員（常勤）1016名の内、女性職員は786名でその割合は、77.4％です。その中で常勤医師は148名、その内32名（21.6％）が女性医師です。

32名の女性医師の中、現在育休中の医師は１名、育児短時間勤務中が３名で、届出率は12.5％という状況です。

因みに他職種の女性職員（ほとんどが看護師）をみると、産休が13名、育休が44名、育短が49名で、届出率は13.5％と医師とほぼ同様です。

②当院の各種支援制度

当院の女性職員への産休・育休・育児短時間勤務制度については、赤十字では法令に定めるより手厚い制度のようです。

子育て支援として、当院では院内保育園を設置しており、定員は50名で３か月から６歳までを受け入れ、利用対象者は全職員です。希望により22時までの延長保育や土曜日の保育、また

月３回までの泊まり保育も実施しています。

ただ、日曜日の保育や病児保育は未実施で、育児中の女性職員へのサポートとしてはまだまだ十分とはいえない現状です。

③女性医師に関する勤務上の配慮

昨年夏、当院の医師負担軽減対策小委員会が、院内で女性医師の所属している各診療科部長に対して、「女性医師への配慮に関するアンケート」を実施しています。

それによりますと、時間外勤務・当直・オンコールについては、妊娠中・育児中にかかわらず女性医師に対して、およそ半数の診療科では回数を軽減するなど何らかの配慮をしていました。

一方、女性医師だからという理由で当直等を軽減することは不公平感をもたらす、女性医師への配慮を手厚くすればするほど、男性医師の負担が増え不満が生じるのではないかとの意見も見られました。

なお、妊娠・育児中の女性医師に対しては、一部の診療科で外来業務や入院受け持ち患者数を軽減あるいは免除するなどの対応をしていました。

また改善点や要望についての意見では、保育園の充実を望む声が多く、日曜日の開所要望や夜間保育、さらに多くの医師が病児保育を希望している現状が伺えました。

④当院の「女性医師の会」

ところで今年１月、当院に「岡山日赤・女性医師の会」が発足しましたので紹介いたします。現在当院には32名の女性医師が在籍しており、先日第一回の会合が開かれました（私は参加していません。参加できません）。ある場所で懇親会を兼ねた会だったようで、28名が参加し８名の子供さんも同伴で参加したとのことでした。(写真参照)

報告によりますと和気あいあいの会だったようで、今後も再々開かれそうです。その際に行われたアンケートの結果を見せていただきました。

主だった意見としては、同じ院内に居ながら普段あまりなじみのない女医さんと話ができて良かった。大変有意義だった。子連れでの参加がよかった。顔が見える関係ができた。などがありました。

中には、女性の権利ばかりを訴えないようにしなければ、との意見も見られました。

病院に対する要望では、やはり院内病児保育を求める声が多かったです。

いずれにしてもほとんどの参加者が、今後もこうした院内の女性医師同士の交流の機会を希望していました。

以上、岡山赤十字病院の女性医師に対する支援の現状と課題について述べましたが、まだまだ十分な対策ができているとは言えません。

一方、女性医師が今後も増えてくる状況を考えると、これは一病院の対応だけで解決するものではない大きな課題です。診療科によっては差し迫った課題ですし、国全体で考えてゆかねばならない問題だといえます。

女性の医師は、女性ならではの出産・子育てなどのライフイベントはあるものの、医師という責任ある職業を自ら選んだ限り、皆さん立派な一人前の医師になっていただかなければなりません。そのためには、当面は不十分ながらも現在ある種々の支援制度を利用し、同時に同僚や先輩医師の応援を得ながら困難を乗り越えて、生涯を医師として活躍されることを期待しています。

そして少なくとも、出産・育児の間、応援してくれる周囲の人と利用できる制度に対して、感謝の気持ちを常に忘れないでほしいと思っています。